教育長賞
福岡楓夕「夏女」

夏女

町田市立真光寺中学校　三年　福岡（ふくおか）　楓夕（ふゆ）

世は夏が終わるというのにコップだって汗をかいている。午前九時三十二分。二分遅れた。そう思いながら玄関のドアノブに手をのばす。ドアを開けると、灼熱の太陽と響きわたるせみの声と一人の女がいった。

「おはよう。朝ごはん食べた？」

夏の風で揺れた髪とともに、彼女が言う。俺は首を横にふった。それを見た女は部屋に入り台所へ行った。慣れた手付きで冷蔵庫を開け卵を割る。彼女は「夏女」だ。よく聞く、雨男、雨女のように、彼女と一緒にいれば三百六十五日、夏になる。俺は、元々夏が好きだった。子供の頃から夏といえば夏休みであり、この夏休みが一生続いてほしいと宿題に追われた子供時代誰もが思ったことがあるだろう。俺は毎日が幸せだったが、彼女はどうだろうか。生まれてからずっと、夏の彼女に聞いてみた。台所に立つ彼女の手が止まる。

数秒たった後、ふり向いて言った。

「うん。幸せかな…。」

優しく笑った。その笑顔は儚かった。まるで夏の終わりの切なさのようだ。幸せにしたい。そう思い俺は、彼女が帰った後考えた。違う季節を堪能して欲しい。他に彼女と同じ経験している人はいるのだろうか。調べると、人生を秋と過ごす「秋女」を見つけた。とある日、家に招待した。俺の目を見て微笑む彼女に何だか温度の低さを不快に感じる。午前九時三十分に玄関を開ける。しかし彼女の姿は見当らない。いつもの灼熱の太陽とせみの声もない。あるのは、秋の色に染まった俺の街だけだ。その日から夏は俺の人生から消えた。どうやら一度に二つの季節は訪れないらしい。

「今日からは秋ですね」

秋女がつぶやいた。

審査員講評 **********

教育長賞
福岡楓夕「夏女」

まるでトレンディードラマを一本観たかのような、お洒落でスタイリッシュな世界観に魅了されました。そして何より夏女というアイデアがとても素晴らしかったですね。読んだ後にまるで夏の終わりのような一抹の寂しさを感じる、素敵なファンタジーでした。

―― KEN THE 390